19、20世紀ヨーロッパの蔵書票コレクションについて

美術工芸資料館　技術補佐員　中川可奈子

美術工芸資料館には、19世紀末から20世紀にかけてのヨーロッパを中心とした蔵書票のコレクションがある。本資料は約13000点にも及ぶ膨大なもので、1995年に臨川書店より購入し、本学附属図書館に図書資料として分類されたのち、資料的な観点やその保管および調査研究の都合上、2005年に美術工芸資料館蔵資料となった。

蔵書票とは、本の所有者を示すために、本の見返し部分に貼り付ける小紙片である。蔵書票には、多くの場合、「だれそれの蔵書から」という意味のラテン語Ex Libris（エクスリブリス）と本の所有者（票主）の名前が記載され、それに加えて票主の職業や地位、趣味などを示すさまざまな図案が描かれている。

蔵書票は、15世紀半ばのドイツで誕生し、ヨーロッパ各地に広まった。蔵書票が生まれる以前から、西洋において、書物は非常に高価なものであったため、その貴重な書物の紛失を防ぐために、書物に所有者の名前を書き込んでいた。1440年頃、ドイツのグーテンベルクが発明した活版印刷によって本が量産されるようになると、所有者の名前と紋章を入れた木版画の蔵書票が作られるようになった。西洋の紋章は個人を表し、書物と同じく、上流階級の人々のみが持つことを許された特権であったため、このような特徴が、蔵書票の図案に合っていた。

18世紀後半になると、一般の人々も書物を手にすることができるようになり、これらの紋章を持たない人々の蔵書票には、票主の人柄を示すさまざまな図案が描かれるようになった。例えば、蔵書票が書物と深いつながりを持っていることから、蔵書票に、書物や書斎、読書している人物など、本に関係する絵柄がさまざまに描かれている（図1、図2）。

また、票主の身近な景色や植物、票主の肖像や関わりのある人物、女性、子供などをモチーフにした蔵書票も多く見られる（図3、図4）。

さらに身近な動物や票主と馴染みのある動物がよく現れるが、その中でも最もよく現れる動物は「ふくろう」である（図5）。ギリシャの知識の守護神ミネルバの使いとして、昔から知性と学問、工芸の象徴とされてきた「ふくろう」を図案に入れることで、票主が自らの知識教養の高さを示すか、またはそのような願いがこめられているのではと考えられる。その他には、医学関係の蔵書票に、医療の象徴とされている「へび」のモチーフが使われることもある。

また、身近な生活用具や書物に関係する道具なども蔵書票のモチーフに使われる。例えば、チェコの画家・イラストレーターであるオタカル・シュターフル（1884・1945）のデザインによる蔵書票（図6）にはピアノの絵が描かれている。楽器が描かれている場合は、票主が音楽関係の仕事をしているか、趣味として大切にしていると予想できる。蔵書票の右下には、作家のモノグラムが小さく入れられている。このように作家の名前は、サインやモノグラムなどの形で蔵書票の片隅に小さく書かれていることがある。

木版の技法によって作られ始めた蔵書票だが、その後、さまざまな印刷技法が発明されると、銅版、石版、孔版などの技法を用いた蔵書票が作られた。制作技法が違えば、蔵書票の表現や味わいも変化する。制作技法も図柄と同じく、作家の個性や票主の好みを表現するポイントとなっている。このような蔵書票と関わりの深い印刷や版画に関する道具なども、しばしば蔵書票のモチーフとして描かれる。例えば、1900年にドイツのパウル・フォークト（1859・1924）が作成した蔵書票（図7）は、木製印刷機で仕事をする人物が描かれている。彼は、彫刻家、石版画家として、ベルリンの帝国印刷所（Reichsdruckerei）の芸術監督を務め、ベルリン芸術アカデミーで印刷芸術に関する講義をしており、多数の蔵書票をデザインした。

19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパを中心に発展したアール・ヌーヴォーは、動植物のモチーフや自由で有機的な曲線が特徴的な装飾様式であるが、同時代に作られた蔵書票でも、アール・ヌーヴォー風のデザインや、その後発展した直線や幾何学形態をモチーフとするアール・デコ風の蔵書票も多く見られる。蔵書票は、票主の人柄や好み、作家の個性だけでなく、当時の印刷技法や流行した装飾様式などについても教えてくれる。

近代になると、文字を中心とした蔵書票も見られるようになる。例えば1933年に作られた蔵書票（図8）は、アメリカの蔵書票収集家・研究者であるクレア・ライアン・タルボット（1899・1981）の名前が中央に書かれ、周りに装飾模様が描かれたシンプルなデザインである。この装飾模様は同年に出版されたタルボットの蔵書票に関する著書の表紙や本文に使われているデザインと同じである。

一方、東洋では書物の所有を示すために「蔵書印」が使われていたが、1900年に木版画を学ぶために来日した、チェコのプラハ出身の版画家エミール・オルリック（1870・1932）が文芸誌『明星』で蔵書票を紹介し、日本の大衆にも蔵書票が広まっていった。

本来の目的である所有をあらわすだけなら、文字のみで十分なのかもしれないが、絵柄の方がメインなのではというぐらいに、一枚一枚の蔵書票には、票主と作家のこだわりが見られる。それらは蔵書票としての役割だけでなく、美術版画としての価値を持ち、コレクションの対象にもなった。蔵書票は、同じモチーフが使われていても、票主の好みと作家の個性、制作技法が組み合わさると、無限にバリエーションが生まれる。蔵書票にこめられた本当の意味は、予想することはできても、はっきりとはわからず、蔵書票がとても個人的なものだということを感じさせる。これだけ多くの蔵書票が作られていても、人の数だけ蔵書票があるように、一つとして同じものはないのだということもわかる。

蔵書票は、その図柄の美しさにより、見て楽しむことのできる小さなグラフィックである。さらに、その歴史、そこに描かれた図柄の意味、印刷技法、装飾様式などを知った上で見ると、票主や作家がこめたメッセージをより理解できることもある。自分が蔵書票を作るなら、どのような図案をデザインしようかと考えながら見てみるのも面白い。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館・附属図書館合同企画「Ex Libris―愛書家たちのしるし」（2022年7月19日～8月27日）では、ヨーロッパの蔵書票の魅力を紹介するとともに、蔵書票にまつわる書籍をはじめ、装丁やデザインが凝った美しい本も併せて展示する予定である。本展は、本学の博物館実習生の企画により実施し、企画から展示までのノウハウを実践的に学ぶ機会にもなっている。蔵書票の世界をこの機会にぜひ体験してもらえると幸いだ。

図1
Moltor Matieu
《Ex Libris J.H.Giers》　1902、ドイツ　AN.5198-01-003

図2
Kaete Steinbeck
《Aus der bücherei von Ludwig Scheffler》　AN.5198-10-012

図3
Leonid Pasternak
《Ex Libris Pawel Ettinger》　1902、ロシア　AN.5198-01-017

図4
Frisch
《Ex Libris Mizi Springer》　AN.5198-22-041

図5
Martin Thiele
《Ex Libris Max Thiele》　ドイツ　AN.5198-20-027

図6
Otakar Štáfl
《Ex Libris Dr. A. ČRK》　チェコ　AN.5198-02-110

図7
Paul Voigt
《Ex Libris Gustav Drobner》　1900、ドイツ　AN.5198-04-084

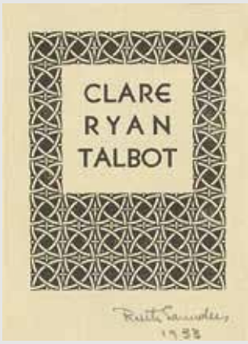

図8
《Clare Ryan Talbot》　1933、アメリカ　AN.5198-20-038

参考文献
・樋田直人『蔵書票の美』小学館、1986年
・樋田直人『蔵書票の芸術―エクスリブリスの世界』淡交社、1997年
個別作家情報
・https://cs.wikipedia.org/wiki/Otakar_%C5%A0%C3%A1ft
・http://www.rasbach-rare-books.de/pub/index.php?Detail/3194
（すべて最終閲覧日：2022.6.15）